

十翁嬉戯如小兒と見えたり、四十を老の始とするよし、西土にいへり、内經には五十以上爲老と見ゆ、

〔八雲御抄三下〕老 おいさび 翁さび 老らく 老のよ つふさめ 老たるを云、一説、

〔書言字考節用集四〕髯殿音曲所言、 老人通稱、

〔謠曲〕高砂

シテ 仰のごとく古今の序に、高砂住の江の松も、相生の様に覺えとあり去ながら、此尉はあの津の國住よしの者、是成うばこそ當所の人なれ、しる事あらば申さ給へ、

〔令義解二〕凡男女三歳以下爲黃略 中 六十一爲老六十六爲耆

〔萬葉集四〕大伴宿禰家持和歌一首

百年爾老舌出而與余牟友吾者不厭戀者益友

〔萬葉集十〕歎舊

寒過暖來者年月者雖新有人者舊去

物皆者新吉唯人者舊之應宜

〔萬葉集十六〕昔有老翁曰竹取翁也略 中

古部之賢人藻後之世之堅監將爲迹老人矣送爲車持還來

〔古今和歌集一〕櫻の花のもとにて、年のおひぬることをなげきてよめる、 きのともものり

色も香もおなじ昔にさくらめど年ふる人ぞあらたまりける

〔古今和歌集十七〕題しらす よみ人知らず

世中にふりぬる物は津の國のながらの橋と我と成けり

〔源氏物語九〕いくばくも侍るまじき老の末に、打捨られたるがづらくも侍かなとせめて思ひし